献呈のことば

日本文化学部長　上川通夫

久冨木原玲先生が本学に赴任され、教授会で挨拶された時のことをありありと思い出します。すっくと起立して、着任日以来の感想をお話しになりました。まだわずかな日数ながら、県大生の思いやりある目線と姿勢に接してとても気持ちが暖まる、ということをおっしゃいました。この大学の良さをすぐに感じ取っておられることに、心強い安心感をその場の皆さんと共有できました。あの日から十一年、研究者として、教育者として、また日本文化学部長や教育研究審議会委員などとして、たくさんの場面で活躍される先生に接する機会があり、得がたい幸いを感じて参りました。

個人としても、久冨木原先生の印象的なお姿をたくさん思い出すことができます。一つだけ、心にしまっておくには惜しい場面を記させてください。

久冨木原先生は、日本文化学部の国際交流活動を率先してくださいました。その一つ、二〇一三年に、スペイン・マドリッドの国際政治学研究所で研究報告会を行いました。日本文化学部から六人で渡航し、当時学部長の久冨木原先生が団長格でした。六人の報告は、川畑博昭先生がスペイン語で話された以外、日本語で行いました（通訳者がいました）。着物姿の久冨木原先生が『古事記』や『源氏物語』に分け入って堂々とお話しになったことは、どなたにも想像できることでしょう。私がいつも思い出すのは、当日朝のホテルでのことです。

マドリッド中心街にある居心地よいホテルで、たまたま私は久冨木原先生の隣室でした。のんきに朝食を食べて部屋に戻ろうとした私は、凛々と通る久冨木原先生の声を廊下で聞きつけました。日本に電話されているのかなとも思ったのですが、漏れ聞こえるといった程度ではなく、ハッキリと聞こえるお話の中に「近江の君」が登場しましたので、

「あ、今日のご報告の練習だ」と了解しました。頭が下がると同時に背筋が伸びる、という経験を致しました。経験豊富な大学者こそ準備に余念がない、ということを肝に銘じて、この話を学生にたびたび聞かせています。マドリッドで源氏物語研究を発信される意気込みの一端としても、ぜひここに書き残したいと考えました。お許し下さい。

久冨木原先生と同じ学部に所属して、その南国らしいゆったり流れる空気と、目線や身体や心情といった人の本質を古典文学から掴み取られる大胆さとを、身近に感じる年月でした。日本文化学部の教授会においても、むつかしい問題に直面しながらも、ずいぶんと雰囲気を和ませて下さいました。学会第一線での個性的研究と、職場での親身な教育とまっすぐな実務手腕とは、先生のお人柄の中枢に発していることと思い、まさに仰ぎ見ています。その背景には、天性のお人柄のほかに、長く培ってこられた人生経験の数々があることでしょう。ご退職の節目に、まずはいったん肩の荷を下ろして下さい。そしてまた今後、あらためて私たちを和ませかつ激励する背中を見せ続けて下さい。久冨木原先生のご退職は、日本文化学部にとっても一つの節目となります。人文社会系の日本文化学部が、今後一層その本領を発揮するように努力することで、先生からいただいたご恩を少しでもお返ししたいと考えています。国語国文学科と歴史文化学科で一緒に記念号を発刊するのは初めてのことです。これも久冨木原先生のおかげです。謹んで献呈致します。

それにしても県大生を羨ましく思います。久冨木原先生から『源氏物語』の研究を教授されたのですから。思いやりの心ある県大生は、古典文学に接する際の鷹揚さと鷲掴みの精神を学んだに違いありません。これまで教職員は、そのことをやや遠目に眺めていました。今後、少し自由なお立場になられましたら、『源氏物語』について直接ご指導いただける機会がありますよう、卒業生・教職員ともども、楽しみにしています。よろしくお願い申し上げます。

ますますお元気でお過ごし下さい。

二〇一六年十二月十九日